

## 二宮尊徳翁と渋沢栄一翁

二宮金次郎(尊徳)と言へば、今でも薪を背負って読書してゐる姿を思ひ浮べられる方が多いと思ひます。その手にする本は何でせうか。像にその書名がはっきりと刻まれてゐます。儒教の経典『大学』です。それは「修身・齐家・治国・平天下」の道を説いた書です。その中に「徳は本なり、財は末なり」とあります。これを世の学者たちは「徳は重んずべきものであり、財は軽んずべきものである」と解いています。

然し、翁は「本とは木の根、末とは枝葉の事である。木に取っては、根も枝も葉もいづれ劣らず大切なものである」と解きます。ただ枝葉を栄えさせる為には、枝葉は放っておいて根を培ふことが必要なのです。根を培へば枝葉は自然と栄える。そのやうに財においてもこれを豊かにしようと思はれるならば、財を求める前に自分の徳を培ふことが必要なのです。徳を養ひ磨く事を怠って財を求める事にのみ熱中したのでは、財は得にくく、得ても永続きしない、と教へます。

明治時代に尊徳翁の精神を実業界で実践し、その正しい事を証明したのが渋沢栄一翁でした。翁は「右手に論語、左手に算盤」説を唱へました。翁は国立第一銀行を初め5百余の会社を設立し、これを立派に経営したばかりか東京商大(一橋大学の前身)を創立し、中国古典教育

で有名な二松学舎の舎長を勤めるなど、経済と教育とに献身された方です。

今でも、超一流の企業は総て道德と経済との調和がうまく取れてゐます。いや、調和がうまく取れてゐるから繁栄してゐるのです。道德を無視したら、一時は繁栄するやうに見えても、いつかはきっと転落するに決つてゐます。これを「天網恢々、疎なれども漏さず」と言ふのです。どんなに美しい花を咲かせてゐても、根が衰へたら早かれ晩かれ枯れるに決つてゐます。

渋沢翁は84歳で『論語講義』を刊行されましたが、その序文に「名教學術は実業によって貴く、実業は名教道德によって光を發す。二者は固より一致にして相睽離する事を許さず。もし二者睽離せんか。学問は死物となり、名教も道德も紙上の空論となる。……」とあります。これは『大学』の「仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す」の思想に通ずるものです。財の大事である事は誰でもよく知つてゐますが「財は徳によって光を發するものである」事を知る者が今は残念ですが少ないやうです。